

17-第13-A②-7 一般演題

10月17日(金) 10:00～11:00 第13会場 ホテルメトロポリタン盛岡 NEW WING3階 メトロホール西
全般的なケア② 【座長】中山 博識 (老人保健施設たき)

第1群：101 入所

第2群：202 症例・事例による貴重な意見

第3群：A3304 全般的なケア チームケア

在宅復帰に向け

～自分の居場所は家！～

介護老人保健施設 リハビリタウンくじ

松坂 弥生、浜坂 聡

利用者の尊厳『家に帰りたい』。自分のいつも見慣れた場所、使い慣れたもの。自分の時間、近所の人。そして誰でも最後に帰る場所家。望む暮らしを提供するため全ての職種で関わった事例を報告する。

【入所時の様子】

入所時、めまいとふらつき、夜間の不眠を訴え娘に支えられ入所したN氏。「とうとう施設でお世話になる日がきました。よろしく願います。」と自分の身体状態をよく理解されており施設入所を肯定的に受け止めている様子であった。

【経過】

1ヵ月が経過すると、体調が安定し散歩を積極的に行い、同じ施設入所中である姉と過ごしたりと、だいぶ施設に慣れてきた。その半面体調が良くなったことで本人の自宅に戻りたいという思いがいっばいになり不満を訴えることが多くなった。几帳面で細かい性格もあり、自分の考えを何度も訴える日が続いた。

「自立した生活がしたい、今ならまだできると思う。」「どうせいつか死んでしまうのだから、歩けるうちは家で暮らしたい」「子供たちは私の気持ちを理解しようとしな。それなら死んだほうがましだ」と不満が膨らんだ。

ユニット職員は根気強くいつでも話を傾聴し、相談員は本人と家族の気持ちを聞き双方の考えを把握したうえで、すこしずつ外泊の機会を持つまでになった。

娘と外泊をしてもお互いの気持ちの溝はなかなか埋めることができず、すれ違いが多かったが、本人が娘に伝えることができない思いを職員が代弁し伝えた。

N氏には「わかってもらえるまで少しずつ外泊を増やし、娘から信頼を得るまで頑張りましょう」と働きかけた。

毎日万歩計をつけて自宅復帰に向け運動をし、周りに対しては自分の気持ちのコントロールを行い『在宅復帰』という目標を明確とした生活に努めた。定期的に外泊を行う最中、N氏が自家用車を運転していることがわかり話し合いをもったり様々な出来事があった。そんな中でも徐々に家族も同じ方向をみて目標を同じと捉えてくれるようになり、娘も時々外泊を試みてくれた。外出・外泊の機会が増えた8月～1月の期間、徐々にN氏の認知度も向上している。(別図参照)

11ヶ月経った頃、娘より「おかげさまで元気になりました。本人が望んでいる事です」と笑顔で話す姿へと変わっていた。それからは、包括支援センターに相談し包括の担当者とケアマネ、相談員が本人とともに自宅の生活環境を見に行き、ガスコンロをIHに変えることを提案した以外は一人暮らしでも十分な環境だと確認できた。

H26.2.28 娘とともに元気に手を振って退所をした。この時の2人の姿には約1年間の時間模索しながらも乗り越えた晴れ晴れとした笑顔が印象的であった。

【まとめ】

今回のケースは「N氏が希望どおりに在宅復帰ができてよかったね」と言うことが焦点ではありません。確かに初めは「家に帰りたいんですよ」と言われれば「そうですね」と職員の感覚は軽く、自分なら大丈夫というN氏の強すぎる主張や入所後、取り戻した強い自信が家族を困惑させ、本人を見ようとしな。声を聞こうとしな。背中合わせの時期がありました。しかし、在宅復帰をするためには家族がN氏を認め、信頼できなければ叶いません。家族の協力を得て外泊を増やし関係を再構築できたのは「来春自宅復帰。残りの人生を友人や地域の人に支えられて生活したい」と望み、実現のために本人の努力もありました。外泊が増えたのも『父を知ろう』とした表れであり言葉に耳を傾け想いを受け入れて、心配し思いやる過程を垣間見ることができたのは貴重な体験でした。ここに至るまでの様々な出来事に関わった皆が向き合った結果、人の心が動くことを知り、家族の在り方・尊厳について学ぶことができました。現在N氏は当施設のデイケアを利用し元気な姿を毎週見せてくれます。また娘さんからは今でも電話があり交流が続いています。

高齢となった今、尊重しあえるこの家族の関係がN氏の本心に望む暮らしだったのではないのでしょうか。

外出・外泊回数とHDS-Rの変化

